文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）

平成27年度

中部地区COC事業採択校
学生交流会
報告書

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community

CONTENTS
目 次

はじめに …… 2
概要 …… 3
発表テーマ …… 4
評価 …… 5
アンケート結果 …… 6
ポスター紹介
香川大学 …… 12
金沢工業大学 …… 13
岐阜大学 …… 14
滋賀県立大学 …… 15
信州大学 …… 16
中部大学 …… 17
富山県立大学 …… 18
名古屋学院大学 …… 19
日本福祉大学 …… 20
福井大学 …… 21
三重大学 …… 22

はじめに

平成25年にCOC事業採択後、岐阜大学が幹事校となり、中部地区を中心としたCOC事業採択校情報交換会を実施した。岐阜という地理的な利便を活かして、岐阜大学が中心となり近隣の大学に情報交換会開催を呼びかけたことで、平成25年度には8大学、26年度には13大学の参加があり、多くの大学の賛同を得ることができた。中部地区COC事業採択校情報交換会では、相互に事業計画や事業進捗を報告し意見交換を行うことで、各大学の教育プログラム等の課題や改善点を自身の取組みや教育プログラムに反映させることができた。また、平成26年度の情報交換会の際には、岐阜大学と金沢工業大学が幹事校となり、各大学の学生が集いそれぞれの地域での活動や取組みを発表し合う学生交流会を企画、実施するに至った。

平成27年度の中部地区COC事業採択校学生交流会は、平成28年3月1日にJR岐阜駅前のじゅうろくプラザにて、岐阜大学及び金沢工業大学が幹事校となり開催された。参加大学は、中部地区を中心とした近隣の大学に加え、特別参加として香川大学の計11大学であった（参加者105人）。同交流会は、参加大学の学生が集結し、平成27年度の活動（グループ活動やプロジェクト等）についてプレゼンテーション及びポスターセッションを行い、他大学の学生同士が互いに発表し合うことで刺激し合い、今後の学生による地域での活動や取組みの促進を図る絶好の機会となった。平成28年度以降も、引き続き学生交流会を開催し、中部地区における独自のネットワークを形成し、COC事業を発展させていきたいと考えている。

概要

今回で2度目の開催となる中部地区COC事業採択校学生交流会は、中部地区を中心としたCOC事業（またはCOC＋事業）採択の計11大学の代表学生が、グループで取組んだ地域での活動やその成果を学生・大学関係者、地域の方々及び企業関係者などに向けて発表を行い、あわせてポスターセッションを行うことで、参加した学生同士だけではなく学生と参加者が活発な意見交換を行うことができた。学生交流会をとおして、各大学はCOC事業の取組みを広く発信することができ、また、学生は他大学との学生と地域活動などに関して意見を交わし合いながら交流を深めることで、互いに刺激し合いこれまで以上に学生たちが地域での活動を発展的に取り組むことが期待できる場となった。また、口頭発表やポスターセッション後の情報交換会では、参加大学の学生や教職員が、和やかな雰囲気のもと互いの発表や日頃の活動や取組みについて語り合う場となり、より一層交流を深めるとともに、絆も深めることができた。

[日　時] 平成28年3月1日（火）13:30～17:15

[場　所] じゅうろくプラザ（岐阜市）

[参加大学]

中部大学、名古屋学院大学、日本福祉大学、金沢工業大学、三重大学、信州大学、富山県立大学、福井大学、滋賀県立大学、香川大学（特別参加）、岐阜大学

[来　賓] 永田昭浩　文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐

[参加者数] 105人（内訳：学生 49人、大学教職員 47人、一般・来賓 9人）

[プログラム]

1．COC事業の取組みについて各大学の代表学生による発表
　（13分（発表8分＋質疑３分＋入替２分）×11大学）

2．取組み・活動に関するポスターセッション

3．講評　佐藤恵一　金沢工業大学副学長
　　永田昭浩　文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐

[情報交換会（交流会）]（17:30～19:00）88人出席

発表テーマ

発表順	大学名	テーマ
1	香川大学	**伝統工芸・讃岐提灯を活用した屋島活性化プロジェクト** ねらい：高松市と香川大学が連携したプロジェクトで、教育プログラムを通じて地域活性化に貢献することを狙いとしている。 対象地：近年観光地として衰退している「屋島山上」を対象とする。 活動内容：「源平合戦の地、屋島」としてPRされているが、屋島最大の資源である夕夜景が活用されていない。そこで、高松の伝統工芸である「讃岐提灯」を活用することで、屋島の夕夜景を魅力的にみせる活用策を実施した。具体的には、1屋島山上でのコンサート時に111個の讃岐提灯を道に飾る、2夜景とコラボしたイベントとして「一夜かぎりのちょうちんカフェ」を開催した。
2	金沢工業大学	**MaTE(Machine Tools Enthusiat)~地域企業との交流から得た気づき と成長~** MaTEプロジェクトは、地域の工作機械関連企業の若手技術者と学生が、これからの社会を支える技術者となるため、共にスキルアップすることを目的としたプロジェクトです。若手技術者と一緒に勉強会を行ったり、熟練技術者と卓上工作機械の製造・解析を行ったりしながら知識の充填を図っています。そこで得知識を活かしたモノづくりも行っています。今回、地域技術者との交流から得た自身の気付きと成長についてプレゼンテーションします。
3	岐阜大学	**秘密基地大作戦IN冒険の森** 岐阜県郡上市白鳥中学校は校区が広く小学校間の交流が難しい。そこで小学6年生を対象に異なる小学校の子ども同士で交流の場を設け、子どもたちが「中学校に行くことが楽しみになる」ように石徹白地区で秘密基地づくりを企画した。活動当日は雨天により石徹白小学校でレクリエーション活動を行い、子ども同士の交流を図った。
4	滋賀県立大学	**地域教育プログラムを受講して** ○地域教育プログラム（2015年度開始） 基礎…全学部生対象「地域基礎科目」において、コミュニケーション力、構想力、実践力の基礎を養う 展開…「近江楽士（地域学）副専攻」「地域志向専門科目」において、地域とのつながりをデザインするための理論や手法を学ぶ 応用…具体的な地域フィールドや地域課題をテーマに自らの専門性を生かしたプロジェクトに参画することで、実践力を鍛える
5	信州大学	**複数企業取材型インターンシップ（地域ブランド実践ゼミ）」** 地方で「働く・暮らす」は、都会と同じじゃない!? どんな点で感覚（バランス）が違うのだろうか。将来を担う当事者の私たちが、地域企業を取材し、地方で”好住”する人々から、地域とのカップリングに必要な視点・課題を探り、提案や情報発信をします
6	中部大学	**春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育ー** **①春日井マラソン救護班活動・②障害者アスリート発掘プロジェクトの紹介ー** 中部大学生命健康科学部が中心となって展開する取組みを紹介する。学生と教員が地域の「日常」を経験し続けながら、諸課題の解決に地域の方々と共に取り組んでいく姿は、昨今の時代を生きるモデルとなると考えている。
7	富山県立大学	**COC学生団体のすゝめ** 富山県立大学でCOC活動を実施する学生団体「COCOS」の活動報告をします。 また、ゼミなどの取り組みだけでなく専門の学生団体が活動する重要性を説明し、こうした団体を広めるきっかけを作りたいです。
8	名古屋学院大学	**熱田区孤立を生まない地域づくり事業** 区内の“孤立防止”を目的に、熱田区社会福祉協議会と連携し、地域福祉に関わっている。大学や学生、地域を取り巻く様々な人や環境を社会資源と捉え、チーム名でもある“Connection”を醍醐味に相互作用を促す活動を展開。区内の自治組織から区域全体と、活動の視点に幅を持ちながら学びと実践を行っている。
9	日本福祉大学	**４コマ漫画による認知症啓発** 地域研究プロジェクト」は、指導教員がプロジェクトを開設し、自治体や地域関係者と協働しながら様々な地域貢献活動を行う科目である。地域のニーズに呼応しながら企画・立案が行われ、イベントや調査、共同研究では、領域を超えて他のプロジェクトに参加することができる。これにより、市民協働力（シビック・エンゲージメント）を身に付け、共に学び、成長する地域の担い手を養成する。 認知症啓発プロジェクトでは、認知症の人やその家族が、地域で安心して暮らせる環境を整えるため、株式会社ユニーグループ・ホールディングス様と共同で、４コマ漫画を使って認知症について気軽に学ぶ事のできる教材を開発した。
10	福井大学	**目指せ！災害に強い地域づくり 地域とつながるプロジェクト** 福井県には、少子高齢化・過疎化・地域コミュニティの衰退、原子力発電所が多く立地しているという地域の課題がある。この地域の課題を解決するために、地域の課題と大学の資源のマッチングを行い、１．地域防災プロジェクト、２．原子力災害支援プロジェクトを地域との協働で実施した。地域が活性化され「災害に強い地域づくり」の一助となった、学生による主体的な取り組みの実際を提案する。
11	三重大学	**三重大学地域おこしサークルMeikuの活動について** ○地域おこしサークルMeikuでの活動（南部地域活性化プロジェクト神木地区・浅里地区・礫浦地区での学生の活動） …「生まれ育った集落に住み続けて行きたい」という地域住民の思いを支え集落の維持のため、活性化にむけた大学、市町、県が連携した取り組み

評 価

同学生交流会では、各大学の口頭発表に対して、参加大学の教職員及び文部科学省来賓の12人が評価委員となり、その特徴や特色について評価を行った。当日は金沢工業大学の佐藤恵三副学長が評価委員長となり、評価結果と講評を行った。

〈 目的 〉

各大学の学生の活動に対して多様な視点からそれぞれの特色を評価する。本評価は、学生発表の順位付けではなく（相対評価ではなく、絶対評価とする）、参加学生らが自身の活動に対する客観的な評価を互いに知ることにより、今後の活動に学生自身が主体的にこれまで以上に取組めるなど、学生の教育的な効果を目的とし、下記の要項に沿って評価を行う。

〈 評価員 〉

評価員長：金沢工業大学代表者（1名）

評価員：10大学（金工大を除く）からそれぞれ１名を選出、文科省（計11人）

〈 評価方法 〉

評価員長および11人の評価員の計12人で評価する。評価員は各大学の口頭発表（8分間）の内容に対して最もふさわしいと思われる特色を下記5項目の中から１つ選ぶ。

〈 評価項目 〉

・「独創性」：独創的な着眼点・アイディア、発想の面白さ。

・「モデル性」：他大学や他地域に応用できる取組み。

・「地域性」：地域の特色を生かした取組み。

・「調査・研究力」：専門性の活用。着実な調査・研究にもとづく取組み。

・「グループ力」：グループのチームワーク力、地域との連携力。

〈 評価結果 〉 ※下記は各大学が主に評価された項目を掲載している。

発表順	大学名	主な評価項目	発表順	大学名	主な評価項目
1	香川大学	独創性、地域性	7	富山県立大学	独創性、グループ力
2	金沢工業大学	独創性、調査・研究力	8	名古屋学院大学	独創性、モデル性
3	岐阜大学	モデル性、グループ力	9	日本福祉大学	独創性、調査・研究力
4	滋賀県立大学	モデル性、地域性	10	福井大学	地域性、調査・研究力
5	信州大学	モデル性、グループ力	11	三重大学	モデル性、地域性
6	中部大学	調査・研究力、グループ力			

アンケート結果

参加者数105、回答数69（回答率65.7％）

会全体の感想として、94％が「とてもよかった」または「よかった」と回答した。

また、96％の学生が、学生交流会の参加前と比べて地域に対する意識や地域活動への意識が「多いに変わった」または「変わった」と回答した。

［主な参加者の意見］

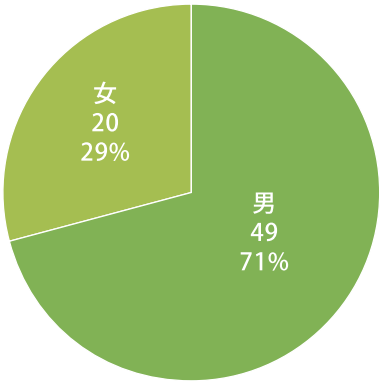
○他の団体がどのようなことを行っているのか知ることができ活動の幅がひろがった。

○自分ももっと活動しなくてはいけないと思った。

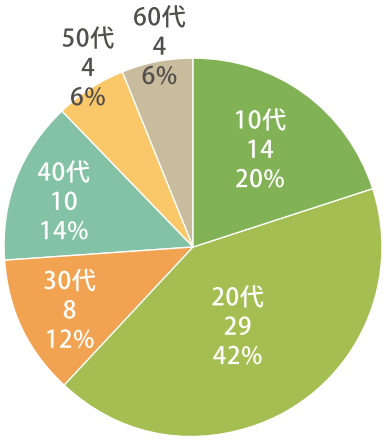
○学生主体の活動事例が昨年より増えてきた印象を受けました。３年目のCOCプログラムを通じて学びが深まってきていると思います。

○同じ取組みをするとしても、地域への提案の仕方、地域との関わり方を工夫し、面白くするとその価値が上がると実感した。

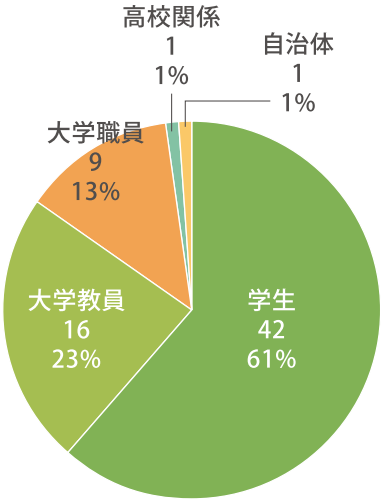
1.性別



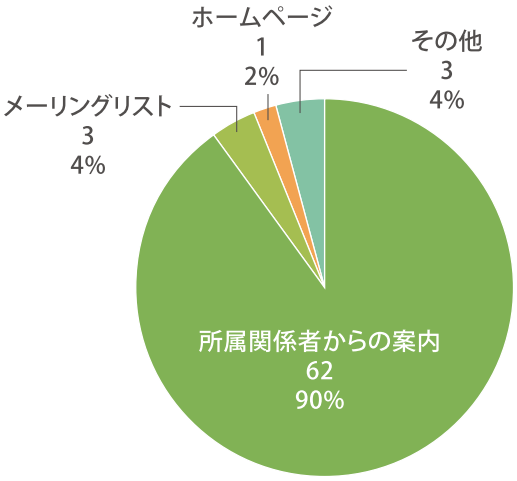
2.年齢



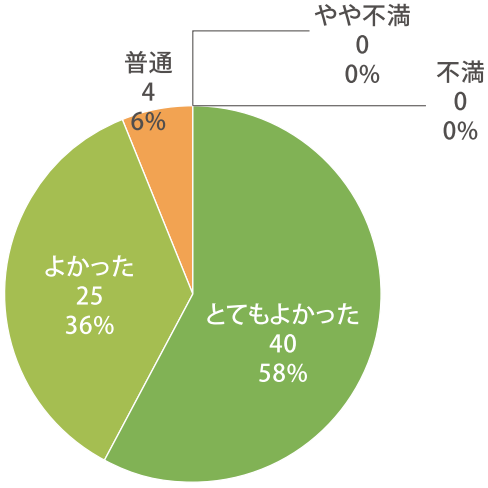
3.所属



4.「学生交流会」を何で知ったか



5.「学生交流会」全体の感想



6. どの大学の発表（プレゼンテーション）が最も印象に残ったか

①名古屋学院大学　23人

（理由：地域にしっかり入り込んだ活動　1人、　内容が明確で印象的　1人）

②富山県立大学　19人

（理由：活動内容がよくわかる　2人）

③岐阜大学　8人

（理由：まとまっていてわかりやすい　1人）

以下　信州大学　4人

中部大学、日本福祉大学、福井大学、三重大学　いずれも3人　ほか

7. ポスターセッションではどの大学が最も印象に残ったか

①富山県立大学　17人

（理由：タブレットを使った見せかたがおもしろい　1人）

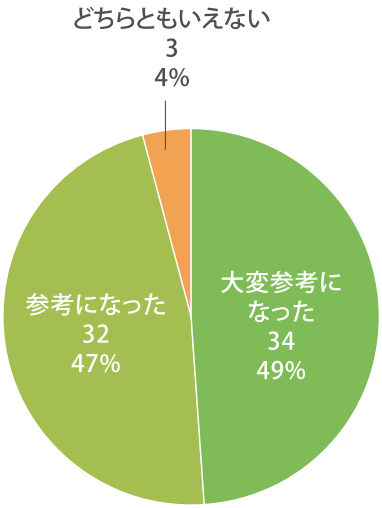
②福井大学　9人

（理由：具体的な活動を体験できる展示　1人、立体図で工夫している　1人）

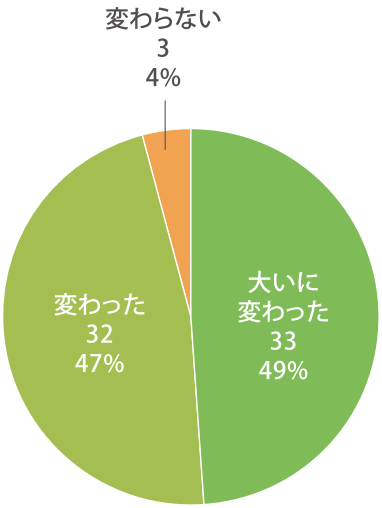
③信州大学、日本福祉大学　いずれも6人

以下　香川大学、岐阜大学、中部大学、三重大学　いずれも4人　ほか

8.「学生交流会」は今後のあなたの取り組み（研究、地域活動、業務など）の参考になったか



9.「学生交流会」の参加前と比べて、地域に対する意識や地域活動への意欲は変わったか（学生のみ回答）



○具体的にどのような意識や意欲の変化があったか（自由記述）

①視野の広がりに関する記述

・認知症や福祉の話を聞き、高齢者と関わった事業も行っていきたいと感じました。
・他の団体がどのようなことを行っているのか知ることができ活動の幅がひろがった。
・自分たちのやってきている事業内容とは種類の異なるものばかりで、自分たちの地域でも取り組めるものがないか考えてみたくなりました。
・様々な地域への関わりがみられたことで自分がしてきた取組みだけでなく、他の関わり方もできるのではないかと考えた。
・他大学の取り組みを知り、「こんな取組みもあるのだな」と驚いた。自大学の取り組みに活かしたいと思った。
・どの学校の方も「地域」という枠組みの中でもどちらかといえば住民を重視していた点。我々も住民に目を向けた活動をしていきたい。

②意欲の高まりに関する記述

・COCの色んな活躍に興味を持ち今後もCOCの活動に参加しようと思う。
・他大の活動にも参加してみたいと思った。
・自分ももっと活動しなくてはいけないと思った。
・他大学の具体的な話を聞けたことで自分もさらに頑張らなくてはと思った。
・地域に大きく貢献したいと強く思うようになった。地域が元気になれば住みやすいだろうし、何より生きていて楽しいと思えるだろうから。
・地域の方々と一緒になって活動していくことをより強くしていかないといけないと思いました。

③活動の参考になった等の記述

・COCの幅広い取組みを知ることができてよかったです。
・地域に対して様々なアプローチ方法があることを知ることができた。
・他の大学の学生がどういう姿勢で地域の方と関わっているのか参考になった。
・私たちが活動している中で発想もしなかったような活動が聞けてもっと考えなければと思った。
・いろいろな話を聞けたので参考になった。
・同じような活動をしているところでも目的などで差があり参考になった。

④その他

・他大学の先生、コーディネーターさんのお話を聞けるのが貴重だと思った。地域おこしの長期視点を大学で考えたいと思った。
・やっぱり地域にまずヒアリングを行って、その地域の問題を考えることから始めることが大切だと改めて感じた。
・地域コミュニティ作りでの女子力の活用を学ぶことができました。

発表会場の様子

香川大学の発表

金沢工業大学の発表

岐阜大学の発表

滋賀県立大学の発表

信州大学の発表

中部大学の発表

富山県立大学の発表

名古屋学院大学の発表

日本福祉大学の発表

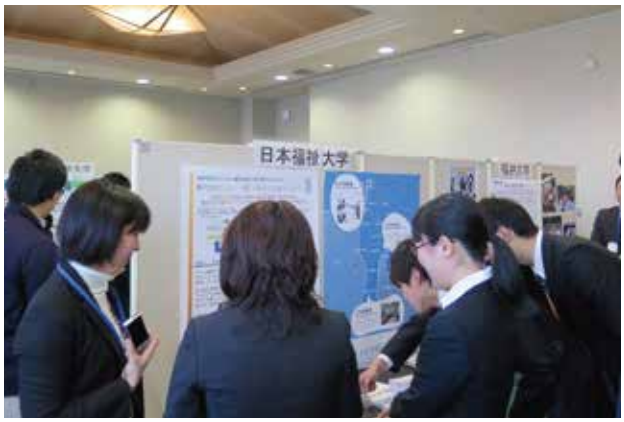
福井大学の発表

三重大学の発表

ポスターセッションの様子

ポスターセッションの様子

ポスターセッションの様子



ポスターセッションの様子

参加大学ポスター紹介

香川大学 …… P12
伝統工芸・讃岐提灯を活用した屋島活性化プロジェクト

金沢工業大学 …… P13
MaTE（Machine Tools Enthusiat）
～地域企業との交流から得た気づきと成長～

岐阜大学 …… P14
秘密基地大作戦

滋賀県立大学 …… P15
地域教育プログラムを通じて

信州大学 …… P16
「複数企業取材型インターンシップ」から考える
地方創生への「ローカル・ワーク・ライフバランス」の提案

中部大学 …… P17
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育
①春日井マラソン救護班活動 ②障がい者アスリート発掘プロジェクトの紹介

富山県立大学 …… P18
工学心で地域と繋がる地域協働型大学の構築

名古屋学院大学 …… P19
熱田区孤立を生まない地域づくり事業

日本福祉大学 …… P20
４コマ漫画による認知症啓発

福井大学 …… P21
目指せ！災害に強い地域づくり
～地域とつながるプロジェクト～

三重大学 …… P22
地域おこしサークルMeikuの活動

01. 香川大学

伝統工芸・讃岐提灯を活用した屋島活性化プロジェクト

香川大学高松観光振興プロジェクトチーム
経済学部１年　宮井七実、遠藤 鈴、高田恭花、冨田ひなた

概要

ねらい　：高松市と香川大学が連携したプロジェクトで、教育プログラムを通じて地域活性化に貢献することを狙いとしている。
対象地　：近年観光地として衰退している「屋島山上」を対象とする。
活動内容：「源平合戦の地、屋島」としてPRされているが、屋島最大の資源である夕夜景が活用されていない。そこで、高松の伝統工芸である「讃岐提灯」を活用することで、屋島の夕夜景を魅力的にみせる活用策を実施した。具体的には、①屋島山上でのコンサート時に111個の讃岐提灯を道に飾る、②夜景とコラボしたイベントとして「一夜かぎりのちょうちんカフェ」を開催した。

教育的な効果・目的

教育目的：現実に起こっている地域課題を自分で把握・発見し、その課題解決に向けた解決策を考案し、実施まで行うことで、地域を活性化するマインドをもった人材育成することが教育上の狙いである。
教育効果：①地域社会への関心・理解②プロジェクトを運営する社会的スキルの向上③自ら考え行動する主体性の醸成

内容

1、プロジェクトの目的

老舗観光地である屋島、最も観光が盛んであった時期に比べて、現在の観光客は往時の２割強程度。そこで、香川県の伝統工芸である讃岐提灯を活かして屋島の活性化を目指す。

2、屋島の問題点

・屋島最大の資源である「夕夜景」が活かされていない
・交通の便が悪い（夜は自家用車のみ）
・17時以降はお店が閉まる
・魅力発信がうまくできていない

What's 讃岐提灯？

・中国から弘法大師が持ち帰り、香川で発祥。
折提灯（おりちょうちん）
・お遍路さんが考案し、愛用された提灯。
・約1000年の伝統があり、現在は香川県のみ伝承される日本最古の提灯。
・イサムノグチのAKARIシリーズは讃岐の折提灯を参考にして作られた。

3、解決に向けたアクション

屋島の夜景をより魅力的にPRしたい → 夜景を惹き立たせる何かがあればいいのでは？ → 提灯の温かみが夜景にぴったり → **屋島×讃岐提灯**

①屋島天空ミュージックでの提灯飾り（夏）

讃岐提灯の作り方を三好提灯店さんから教わる

大学で111個の折提灯を作成

コンサートの帰り道を折提灯で飾る

②一夜かぎりのちょうちんカフェ（冬）

屋島山上の店舗内に約200個の提灯を飾り、夜景とコラボ

「ちょうちんの間」店舗内の和室を折提灯で魅力的に演出

4、得られた成果

・讃岐提灯を活用することで、屋島最大の資源である「夕夜景」に新たな魅力の可能性を見つけることができた。
・学生が自発的に関わることで、屋島山上のお店の方々に「もしかしたら変わるかもしれない」という意識をもってもらえた。
・Facebookで発信したところ、1記事に対して平均3000人以上の方々に興味を持っていただいた。

学生手作りの提灯を片手に屋島山上をガイド

新聞やテレビなど地元メディアに掲載していただいた

取り組みで得た学び

・自分たちが主体的に地域の課題解決に関わることで、自分事として考えられるようになった。
・地域の方々が望んでいることと自分たちの想いが必ずしも一致するわけではないと知った。まずは自分たちが対象地域の経緯や現状をよく知る必要があると分かった。
・一つの目標に向かうためには、メンバー間の意識共有を行うことが大切であると感じた。

02. 金沢工業大学

MaTE（Machine Tools Enthusiat）
～地域企業との交流から得た気づきと成長～

機械工学科 4年　飯野 智、川岸恭輔

概要

MaTEプロジェクトは、地域の工作機械関連企業の若手技術者と学生が、これからの社会を支える技術者となるため、共にスキルアップすることを目的としたプロジェクトです。若手技術者と一緒に勉強会を行ったり、熟練技術者と卓上工作機械の製造・解析を行ったりしながら知識の充填を図っています。そこで得知識を活かしたモノづくりも行っています。今回、地域技術者との交流から得た自身の気付きと成長についてプレゼンテーションします。

教育的な効果・目的

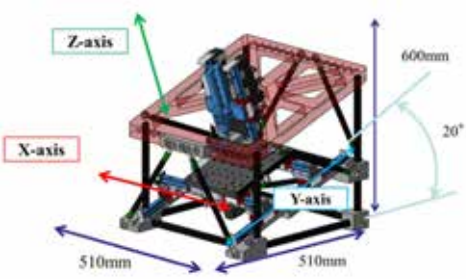
35回にわたる工作機械関連技術に関する講義と実習を地域の技術者と学生に行なうことにより、地域の技術者の技術の底上げと、技術者からの学生への指導、交流を通して学生のキャリア形成を促進することができる。

内容

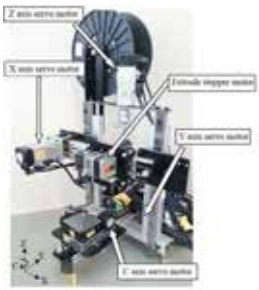
近年の製品の小型化に伴って部品のマイクロ化が求められている。しかし、その小さい部品を加工しているのは大型の複合工作機械であり、必要以上の生産スペースで製品の生産を行っているのが現状である。その問題を解決するために、地域の工作機械メーカーである高松機械工業株式会社の熟練技術者と本学学生が共同で開発したのがデスクトップ工作機械である。

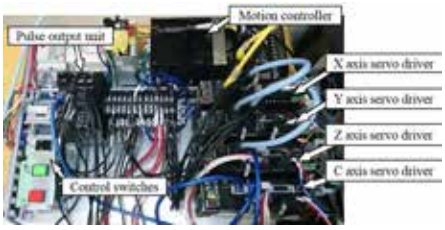
デスクトップ工作機械は設計から部品の製造、組付けそして独自の制御装置に至るまで企業の技術者にアドバイスを頂きながら開発された。

現在では、さらにMaTEプロジェクトの勉強会で得た知識やノウハウを利用して3Dプリンターの自作も行っている。



デスクトップ工作機械の外観


自作3Dプリンターの外観



自作3Dプリンターの制御装置

←企業の方と行う勉強会の風景。金沢工業大学機械工学科の教員から企業の若手技術者と学生に対して行うもの（左）に加え、地域企業の熟練技術者の方から学生に対して行って頂く形（右）も採る。

取り組みで得た学び

MaTEプロジェクトに参加することによって，専門知識の底上げと自身のキャリア形成をすることができた．企業の熟練技術者の方と共に工作機械の開発を行うことで，実際に現場で必要となる知識を吸収することができた．普段学校の授業だけでは学ぶことのできない貴重な話もたくさん聞くことができ，自分の将来を考えるよい機会になっている。

03. 岐阜大学

秘密基地大作戦

教育学部4年　渡辺海月、石田晃貴、井戸田綾子、今枝萌子、北垣里奈

概要

岐阜県郡上市白鳥中学校は校区が広く小学校間の交流が難しい。そこで小学6年生を対象に異なる小学校の子ども同士で交流の場を設け、子どもたちが「中学校に行くことが楽しみになる」ように石徹白地区で秘密基地づくりを企画した。活動当日は雨天により石徹白小学校でレクリエーション活動を行い、子ども同士の交流を図った。

教育的な効果・目的

次世代地域リーダー育成プログラムの上級段階の科目であり、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材として必要な素養や能力を養うために、実際の地域の課題等に対して取り組む実践的な科目である。

内容

1、企画実施まで

現地を知るため８月から１０月までに現地調査を３回行い、運動会などの地域の行事に参加する中で、地域の方々と交流し信頼関係を築いていった。

また、小学生を対象とするにあたり郡上市教育委員会とも連携し、活動や募集について様々な意見をいただき、チラシを直接各小学校に持って行き、企画内容について説明を行った。その結果、白鳥中学校区の小学校6年生96人中23人が企画に参加した。

2、企画当日

当日は雨天のため、野外での秘密基地づくりが中止となり、小学校の体育館でレクリエーション活動としおり作りを行った。

なるべく同じ小学校の子同士とならないようグループ分けを行い、適宜交流の機会をもてるように各グループにスタッフを一人ずつ割り振った。初対面の子どもたちが多い中、グループでのレクリエーションではお互いに協力しながら、楽しんで活動する様子が見られた。

3、今後の課題

スケジュールの確認をこまめに行うなど、余裕をもって取組めると良かった。

取り組みで得た学び

子どもたちが「中学校に行くことが楽しみになる」ように、常に対象者を意識し、現地に行き直接見聞きするなど、地域の課題について把握したうえで企画を考え、地域住民をはじめ様々な人と交流し信頼関係を築くことで、目的が達成されることを学んだ。

04. 滋賀県立大学

地域教育プログラムを通じて

国際コミュニケーション学科1年　島並佑里子

概要

●地域教育プログラム（2015年度開始）

基礎・・・全学部生対象「地域基礎科目」において、コミュニケーション力、構想力、実践力の基礎を養う
展開・・・「近江楽士（地域学）副専攻」「地域志向専門科目」において、地域とのつながりをデザインするための理論や手法の実際を学び、構想力を高める
応用・・・具体的な地域フィールドや地域課題をテーマに自らの専門性を生かしたプロジェクトに参画することで、実践力を鍛える

教育的な効果・目的

専門性を身につけ、俯瞰的にものごとを見る力を養うのはもちろんのこと、現実の諸問題に創造的に取り組み、変革する能力と態度を養う。

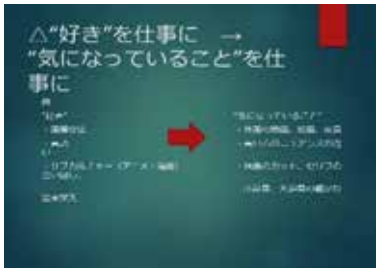
内容

●地域教育プログラムの「基礎」である「地域コミュニケーション論」を履修して

地域コミュニケーション論・・・他者を理解し、共感し、豊かな対話を可能にする力を身に着ける。
「自己理解」「他者理解」「地域理解」「積極的な働きがけ」
滋賀県立大学が独自に提携している地域で活躍し、実績ある「地域人」の方と対話する。

一日目	二日目	三日目
「自分を知り、相手を知る」	「自分をいかす生き方・仕事」	総まとめ
・自己探求シート ・人物紹介	・多様な生き方、働き方を知る。 ・地域人ダイアログ	・地域人インタビュー、紹介記事 ・フリートーク

←自己探求シートでは学科の志望理由、授業の履修理由を描いた。
実際に第三者から「自分」という人間について記事をかいてもらった。



←二日目の授業では自分をいかす生き方・仕事は何か考えた。「好き」という観点からではなく、「気になること」という視点から「仕事」をみてみると、やってみたい仕事ががらりと変わってしまった。

取り組みで得た学び

具体的に地域人の方から、地域で起きている課題を聞き、解決策を考える時間もあった。三日間を通じて私は、自己管理の重要性と、自分が何を求め、企画したいのか把握することの必要性を学んだ。実際に近江楽座で活動している県大生のように、自分が活躍できる場を模索したい。

05. 信州大学

「複数企業取材型インターンシップ」から考える 地方創生への「ローカル・ワーク・ライフバランス」の提案

地域ブランド実践ゼミ　受講生一同

概要

地方で「働く・暮らす」は、都会と同じじゃない!?
どんな点で感覚（バランス）が違うのだろうか。将来を担う当事者の私たちが、地域企業を取材し、地方で”好住”する人々から、地域とのカップリングに必要な視点・課題を探り、提案や情報発信をします。

教育的な効果・目的

ブランドの心理学的研究を通じて、人間の情報処理特性を学びます。さらに学習した知識を理解・経験とするため、責任ある一人の研究者として自治体の共同に参加します（PBL：Project Based Learning）。実践を通じて、リアル・プロブレムに取り組むマインド、地域・社会の新たなブランドを創造するだけでなく、自分自身のブランドを構築する力を獲得します。

内容

1、ブランドを題材に心理学、人間の情報処理を学ぶ

現代社会において企業・人・地域のブランドは、私達の情報処理に大きな影響を与えています。これを心理学という学問分野・研究成果から考えます。授業では、簡単な心理学実験が紹介され、何度も引っかかりました。

ブランド＝人の記憶がどのようにして作られるのかについて、理論的な学習と実際に地域でご当地グルメやイベントのブランド化するケース学習を行う。

2、地域を知るフィールドワークと常に緊張感あるゲストとの対話

授業の第二週からいきなり泊まりがけのフィールドワークで地域のイメージや状況を把握に行きました。先端を行くグローバル企業の訪問から今度は縄文遺跡、江戸の文化・産業を各地元講師と回り、夜は地域給食を作って味わい、真夜中まで議論をしました。また授業では、ほぼ毎回共同研究先の職員や地域のゲストが参加して、新鮮で緊張感ある議論を交わしました。

（左）共同研究先である塩尻市から毎週職員を派遣いただいて、地域とのコーディネートや地域学習の講師をしていただいた
（中）議員の方、（右）地域おこし協力隊の方など地域にとどまらない様々な人達と対話を中心に考える授業を展開

3、インタビュー調査の実践（複数企業取材型インターンシップ）

地方創生において「働く」場は重要ですが、地方の仕事は質・量共に都会とは違います。それになじめないとUIターンはうまくいきません。塩尻という地域ではどんな視点が必要か、課題はないのかを探るため企業へのインタビューを実施しました。私達の気づきは、授業の終了後に市長や市民に対してプレゼンテーションを行い、さらにその後にワークショップで深掘りしました。
これらインタビュー・気づきは、地方創生をPRするための冊子にまとめます。

（左）セイコーエプソン株式会社にてものづくりの発展の歴史を学ぶ（中）国の重要伝統的建造物群保存地区に指定される奈良井宿を訪問（右）塩尻市は長野県内でもワイン造りの歴史が最も古い。ワイナリーとブドウ畑を訪問した。

4、地域への提案、そして自らのアクションへ

授業とは別に塩尻市やまちなか、色々なところに自分達で足を運び、考える場を持ちました。そして、現在は、自分達でイベントを企画したり、団体や課題解決プロジェクトを立ち上げて実践に取り組んでいます。

（左）地方で増えつつあるコワーキングスペースでの事業を取材
（中）塩尻市の平沢地区は漆器として有名な地域であり、現代漆器のブランド化に取り組む企業を取材（右）共同研究事業・インターンシップの成果報告会終了後、内容を深掘りするため地域のみなさんとワークショップを実施した。

取り組みで得た学び

チェンジの始まりは、「気づき」。その大切さを理解した。一つのまちと深く関わって、地域社会のことを自分事として考えるようになった。授業とは別に何度も地域に足を運び、自分達がまち・地域を変える具体的アクションをおこすようになった。

06. 中部大学

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育
①春日井マラソン救護班活動 ②障がい者アスリート発掘プロジェクトの紹介

生命健康科学部　スポーツ保健医療学科　田中貴大、翠川 凌、赤羽祐亮、松岡雅也、河原吉矢

概要

中部大学生命健康科学部が中心となって展開する取組みを紹介する。学生と教員が地域の「日常」を経験し続けながら、諸課題の解決に地域の方々と共に取り組んでいく姿は、昨今の時代を生きるモデルとなると考えている。

教育的な効果・目的

今回の実践において、地域での実践は、机上で学んだ理論や技術だけでは全てが解決しない事を学生は気づいた。このことにより、新たな学習への動機が形成されると同時に、社会が求める汎用的な能力が形成されると考える。さらに、学生が将来に向けた主体的な学生生活を過ごせるようになった。社会とつながることにより、学生生活に対する動機づけが明確になり、主体的な学生生活を過ごしたいと考える学生がほんの少しずつであるが増えて来たと感じる。

内容

☆地域創成メディエーター

「地域創成メディエーター」の資格は、中部大学が自信を持って社会に推薦できる学生であることを認める証です。この資格は、資格そのものはもちろん、取得するプロセス自体が何よりも大切です。
地域の方々と向き合い、社会で必要とされることを「自ら考え」て「行動」し、社会を「動かす」。こうした経験を積むことで、「あてになる人間」に近づくことができます。

●春日井マラソン救護班活動

春日井市で開催されている新春春日井マラソンに救護班として参加することで、地元の方々と交流をしています。3つのコースに9000名以上が参加する大会です。コース上の救護班として、7班体制で活動しました。今回の救護班の活動の中では、小学生の体調不良者がいたため、近くにいた隊が現場に急行しました。また、ゴール時に転倒し、頭部や手から出血のあった方に対して、止血と本部への誘導をしました。

●障がい者アスリート発掘プロジェクト

障がい者スポーツの普及には、大きく３つの課題があります。１つ目はあらゆる対象者がスポーツを行うことのできる場所の不足。
２つ目は支援者及び障がい者との交流機会の不足。そして３つ目は、障がい者にとって最適なスポーツの指導（実践）者が不足している点。これらの課題に対し、本プロェクトでは、学生が中心となって『大学』が課題解決の糸口となり、新たなスポーツ人口とあらゆる対象者の交流機会を生むことで持続可能なまちづくりに貢献する事を目的としました。

取り組みで得た学び

リーダーシップやコミュニケーション能力など、社会で求められる汎用的能力の成長実感に留まらず、中部大学と春日井市への愛着を得ている。これらは、大学と春日井市にとって、非常に大きな資源になると思われる。

07. 富山県立大学

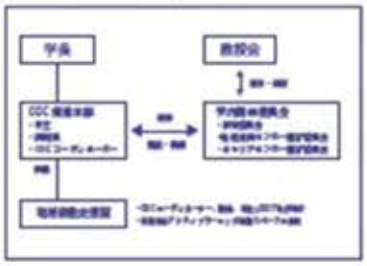
工学心で地域と繋がる
地域協働型大学の構築

本学の取り組み

「富山県の発展を目指した県民の大学」という本学の理念のもと、地域の課題に対して全学を挙げて取り組み、地域に役立つ技術者マインド「工学心」を持ち、地域課題を解決できる学生の育成を図るなど、「地域協働型大学」の構築を目指します。具体的には、少人数ゼミの授業の中で、学生が多様な地域関係者と直接対話や交流などを行い、地域産業の振興や超高齢化社会への対応など解決が困難な課題について、地域関係者と一緒に考えます。学生自らがその課題をとらえ、また、その課題の解決のためどう取り組めばよいかを学修することを通じて、主体的に課題解決する能力を持った人材の育成を目指しています。

▶工学心で地域とつながる全学的取り組み

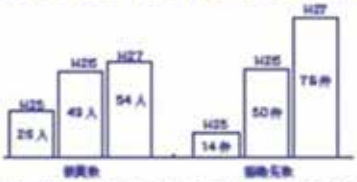
▶事業実施のための推進体制



▶地域を志向したカリキュラム

取り組み事例

▶地域協働授業　実施教員・協働先数推移



※協働先数　107名
（平成27年4月1日現在）

▶持続可能な社会のための都市と交通のデザイン

実施年度　平成27年度

実施概要　公共交通活性化と県外者へのアピールのために路面電車・万葉線の魅力向上を目指し、学生が「おもてなし電車2」を企画、運行しました。高岡市や射水市を訪れる観光客を想定し、電車内を飲食や会話が楽しめる場として、市民団体 BACDA 高岡など地元の方々や大学関係者に乗車してもらいました。

▶海ごみ問題の現状と解決策の提案

実施年度　平成27年度

実施概要　射水市の六渡寺（ろくどうじ）海岸は、2つの河川からゴミが漂着するため大量のゴミが溜まります。本ゼミでは、地元自治会と協働し、ゴミ拾いから始め、実態を調査・把握し、解決策を考えました。現状でのゴミ回収のあり方を考えたり、人々の意識向上を図ることが不可欠であることを確認しました。

▶小矢部市観光活性化に向けた調査

実施年度　平成27年度

実施概要　「道の駅メルヘンにゃべ」と「三井アウトレットパーク北陸小矢部」にて、道の駅及びアウトレット内の観光ブース前で聞き取りアンケート調査、来場中の自動車の登録地域および車のタイプの調査、ドローンによる上空からの車の流れの撮影を実施しました。アウトレットの来客は、道の駅をほとんど利用していないことが明らかになりました。

地域協働研究会 COCOS

▶地域協働研究会 COCOS とは

COC（地域協働事業）のOS（オペレーティング）として機能する富山県立大学の学生団体です。学生主体で地域の自治体などと交流し、共に地域の問題を解決していくことが目的です。学内では、教職員と連携し、COC に関係する授業の組み立て等サポートをしたり、COC ニュース作成・成果報告書の作成を行っています。平成27年3月5日に開かれた「中部地区 COC 事業推進校『学生交流会』」の発表では、評価5項目中4項目で優秀とされました。

▶組織理念

大学COC 事業をあらゆる面でサポートし、5年間の COC 事業登録後も継続できるよう貢献します。
団体自らも COC 活動を行い、地域の課題解決に尽力します。

▶Teaching Assistant

各教員が行う COC 授業で、地域の方々と教員とをマッチングしその授業を補助します。地域との関わりかたを教員と相談し、授業の際にはディスカッションのファシリテーション等授業時間外での支援などを行います。

▶コーディネーター業務の補助

本学では、各ゼミが取り組んだ COC 活動を発表する場として、地域協働授業成果発表会を学期に 1 度設けています。COCOS はコーディネータ業務の補助としてその発表会の運営を行っています。発表会を行う目的は地域協働の活動内容を教員、学生、地域の方々に共有し、各ゼミが行ってきた COC 事業をさらに発展させることです。会場の設営から当日の司会など COCOS が担当し、学校全体の COC 事業の発展に力を入れています。

08. 名古屋学院大学

熱田区孤立を生まない地域づくり事業

地域支援チームConnection Of Community　浅井優輝、坂井勇太、高木雅成
現代社会学部　講師　山下匡将

概要

区内の“孤立防止”を目的に、熱田区社会福祉協議会と連携し、地域福祉に関わっている。大学や学生、地域を取り巻く様々な人や環境を社会資源と捉え、チーム名でもある“Connection”を醍醐味に相互作用を促す活動を展開。区内の自治組織から区域全体と、活動の視点に幅を持ちながら学びと実践を行っている。

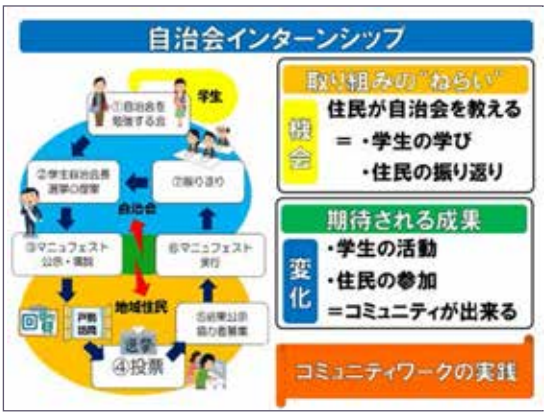
教育的な効果・目的

地域福祉活動計画の具体化・実施・評価といった一連のプロセスに参画することで、実践力をもった減災福祉まちづくりの担い手を養成する。具体的には、つながりが希薄化した地域に入り、住民とともに課題に向き合い、社会資源の開発および地域組織化活動の企画・実施を行うことで、「コミュニティワーク」の力を身につける。

内容

1、自治会インターンシップ

・学生が自治会でインターンシップを行う。
地域住民が学生に地域を教えることで、地域の振返りを促し、コミュニティを見つめ直す機会を創出していく。学生にとって、
　・地域住民から地域の今を教えていただく
　・取組みの中で、歩まれた歴史を知る
　・これからの地域の在り方を考える
地域の現在・過去・未来を学ぶプログラム。
現在、市営南熱田荘を拠点に活動中。



2、「つながり熱田会議」の開催

地域課題をつながりで解決していくために、キーパーソンの発掘やネットワーク創出を目的とした会議。熱田区を対象として様々な業種の方が参加。大家や喫茶店店主、自治会役員など見守りに取組む方々の実践事例などを共有し、見守りの芽を育んでいる。

取り組みで得た学び

身近にある地域課題を自身の肌で感じとり、人が人をつなぐ地域コミュニティの大切さを学んだ。また、学生の役割として、地域コミュニティの住民が自ら課題に目を向け、考え、解決に向け進むための下支えができることを学んだ。地域の一員として、つながりの担い手として、私たちの持つ力を意識して、今後も向き合っていきたい。

09. 日本福祉大学

4コマ漫画による認知症啓発

日本福祉大学　社会福祉学部３年　認知症啓発プロジェクト　鬼頭彩乃

概要

「地域研究プロジェクト」は、指導教員がプロジェクトを開設し、自治体や地域関係者と協働しながら様々な地域貢献活動を行う科目である。地域のニーズに呼応しながら企画・立案が行われ、イベントや調査、共同研究では、領域を超えて他のプロジェクトに参加することができる。これにより、市民協働力（シビック・エンゲージメント）を身に付け、共に学び、成長する地域の担い手を養成する。
認知症啓発プロジェクトでは、認知症の人やその家族が、地域で安心して暮らせる環境を整えるため、株式会社ユニーグループ・ホールディングス様と共同で、４コマ漫画を使って認知症について気軽に学ぶ事のできる教材を開発した。

教育的な効果・目的

地域の課題を研究し、学生主体でその解決の一歩に取り組む。学内での学習に加え、学外で様々な人と変わりながら社会人基礎力を養う。本クラスでは「認知症」をキーワードにして、「認知症の人と家族の会」やユニーグループホールディングス株式会社などと連携して様々な企画やツール開発を行ってきた。

内容

・（先輩達のプロジェクトにおいて）ユニー様の従業員向け認知症研修の効果評価を行い、もともと認知症への理解度が高い人ほど、研修効果(不安の軽減・自信の獲得)があることが示唆された。

・そこで、研修を受ける前に導入教材として、認知症についての予備知識を得られる手軽なツールを作成することにした。

・認知症をテーマにした４コマ漫画を作成。
「NPO法人認知症の人と家族の会」の皆さんに日常生活でのエピソードを聞くなどしてストーリーを考えた。（イラストはプロのイラストレーターに発注）

・ユニー様の従業員の方に読んでいただけるよう
４コマ漫画を三角柱ポップにして
店舗の従業員食堂へ設置していただいた。

取り組みで得た学び

「人との協力の大切さ」を学んだ。この取り組みは、家族会様やユニー様の協力があったからこそできたことだと感じている。特に学外の方に協力を頂く際は、こころよく協力してもらうために、相手のメリットも考えて行動すること、自分達のやりたいことが相手に伝わるように説明できなければならないことも学ぶことができた。

10. 福井大学

目指せ！災害に強い地域づくり ～地域とつながるプロジェクト～

福井大学　医学部　看護学科　高橋優太郎
福井大学大学院　災害看護専門看護師教育課程　大久保貴仁　作川真悟

概要

福井県には、少子高齢化・過疎化・地域コミュニティの衰退、原子力発電所が多く立地しているという地域の課題がある。この地域の課題を解決するため、地域の課題と大学の資源のマッチングを行い、1.地域防災プロジェクト、2.原子力災害支援プロジェクトを地域との協働で実施した。地域が活性化され「災害に強い地域づくり」の一助となった、学生による主体的な取り組みの実際を提案する。

教育的な効果・目的

多職種や災害関連団体との平常時からの協働的実践を通して、緊急時の連携機能も円滑となり、現場に対応した実践力と現場をマネジメントできる災害に強い人材が育成される。また、住民に寄り添う立場にある医療職が、高齢地域・医療過疎地域を含み、日本の原子力施設の約3割を保有する福井県の地域特性を理解する必要性を認識し、住民と協働することで、防災や減災等についての積極的な教育力・実践力が身に着く。

内容

1、地域防災プロジェクト

「つながれ地域の絆～楽しく学ぼう！災害時の応急手当～」

【対象】永平寺町民（福井大学立地地域住民）
【内容】災害の基礎知識、心肺蘇生法、三角巾の使用法、災害時の搬送法などを大学生防災サポーターと共に実践した。
【特色】本年度で3年目の開催であり、参加者の要望を反映させ、「身近にある物で対応できること」や「楽しく学べる工夫」として、ストッキングを使用した処置法や、方言を用いた楽しい寸劇でデモンストレーションを行った結果、住民との絆も深まり、住民のアンケート結果からも好評価を得ることができた。

防災サポーターによる寸劇

ストッキングを使用した処置法

2、原子力災害支援プロジェクト

「福島支援プロジェクト」

①福島県の子供さんとお母様との遊びと語りのプロジェクト
②福島と福井をつなぐ医工連携・学生の輪プロジェクト
③健康サロン アロマでほっこりプロジェクト（平成28年3月19日：いわき市）
④原子力災害机上シミュレーション開発（開発中）

【対象】地域住民・地域組織（地域住民、消防職員、福島大学）
【内容】住民との語り合い、子供達との遊び、工学部と連携した放射線知識の啓蒙活動など。
【特色】原子力災害における被災地での住民との関わりを通し、離れた地であっても被災者を忘れず、これからも継続支援していく事を住民と支援者互で学ぶことができた。また医学部と原子力工学部による医工連携で放射線の専門的知識の普及について、お互いの専門的知識を活かし開発している。

子供達との外遊び

永平寺町ゆるキャラ
「えい坊くん」

母親へのアロママッサージ

工学部による住宅
周囲の放射線測定

「原子力災害机上シミュレーション開発」

福島支援での学びを活かし、医学部学生と工学部の学生が意見交換しながら、誰でも楽しみながら行うゲーム形式の机上シミュレーションを現在開発中。

川内村住民との語らい

机上シミュレーション開発

取り組みで得た学び

学生が主体的に地域と関わりを持ち、学生間で経験を伝えていきながら、大学の資源と地域の課題をマッチングさせたプロジェクトを継続させ、地域と学生が相互に学び合う関係を築いていくことが「災害に強い地域づくり」につながる。

11. 三重大学

地域おこしサークルMeikuの活動

生物資源学部　共生環境学科　2年　古川頌之、平田晃真、伊藤史佳

概要

○地域おこしサークルMeikuでの活動
（南部地域活性化プロジェクト神木地区・浅里地区・礫浦地区での学生の活動）
・・・「生まれ育った集落に住み続けて行きたい」という地域住民の思いを支え集落の維持のため、活性化にむけた大学、市町、県が連携した取り組み

教育的な効果・目的

Meikuは三重大学地域戦略センターと密に連携し、特に過疎化が進み若者との接点を欲している県南部の集落に入り、地域おこし（活性化に資する企画・提言、活動支援）を積極的に行っています。その活動は先輩から後輩に代々引き継がれ、顕在化した成果は地元自治体にも認められ、学生が関与することを条件に自治体から地域戦略センターに事業委託があるまでに至っています。これらのことから、Meikuの活動は、本学が推進するPBLの延長線上にある理想的な課外活動（フィールドワーク）と捉えることもできます。

三重大学地域戦略センターについて
地域イノベーション大学を指向する三重大学の社会連携の要として、地域活性化に資することを目的とした大学発のシンクタンクです。大学が持つ知を活用し、自治体、産業界等と連携して、地域が抱える課題に対しての政策提言および施策展開を行っています。一方で学生に対しては、実践教育の場を提供する目的でOPT（OntheProjectTraining)を通して、「地域イノベーション人財」を育成することを目的とした、社会と学生のハブ（HUB）として機能しています。

内容

【浅里地区】

1.浅里体操
・始めは、ただのラジオ体操だった。
・話合いをしていく過程で、浅里は、農家の方が多く、肩こりと腰痛に悩んでいるひとが多かった事が分かった。
・この体操をしてから、話し合いをするようになった。

2.なれ寿司祭
・地域の方が望んでいる「集まる場所」の意味が定期的に集まる場所ではなく、お祭りの様な場であることが次第に分かる。
・住民の方々がお祭りをするきっかけ作りをすることができた。

3.学生新聞
・浅里訪問後に作成し、住民と学生の活動を知ってもらう。
・なれ寿司祭りの学生新聞は、祭りの前日に、住民の家を訪ねて手渡しをした。

4.飛雪米の販売
・ウミガメ公園にて飛雪米を販売する。
・試食を通して、飛雪米の「おいしさ」を知ってもらうことに成功！

【礫浦地区】

1.他地域への視察
・早田地区・九鬼地区に視察することとなった。
・早田地区では活性化の取り組みを行う大きな組織であるビジョン早田実行委員会や笑顔食堂などの取り組みについてのお話、九鬼地区では網干場での取り組みについてお話していただいた。

2.夏祭りのお手伝い
・学生は夏祭りで提供されるまぐろ寿司の準備など
・今後もイキさらメンバー主催で続けるには時間の短縮やスケジュールの見直しを行い負担軽減の方法を考えること

3.アンケート調査
・釣り堀客に向け礫浦に来た理由食べ物で何があったら嬉しいか等のアンケート
・釣り堀客に向けたアンケートは日程が悪く件数が少なかったが、礫浦では食べるところがないことも課題にあがった。

【神木地区】

1.女子会の開催
・従来の話し合いは男性が多かったこと、前年度の提案に否定的な意見が多かった。
・女性の意見を聞き、異なる角度から地域を見ようと試みた。
・女子会を開き郷土料理の食べ比べ、料理を通して会わない人同士が交流することができた。
またウォークラリーで世代間交流を図った。

2.facebookの立ち上げ
・神木地区の行事や学生の活動を地域内外に発信したいという思いから立ち上げた。

3.神木フェスタの開催
・区民の高齢化に伴い年々参加者数が減ってきた区民運動会を盛り上げ、地域内の世代間交流を図るため、ウォークラリー・屋内運動会・BBQなどコンテンツ盛り山の神木フェスタを開催した。

[図1　浅里　学生新聞]

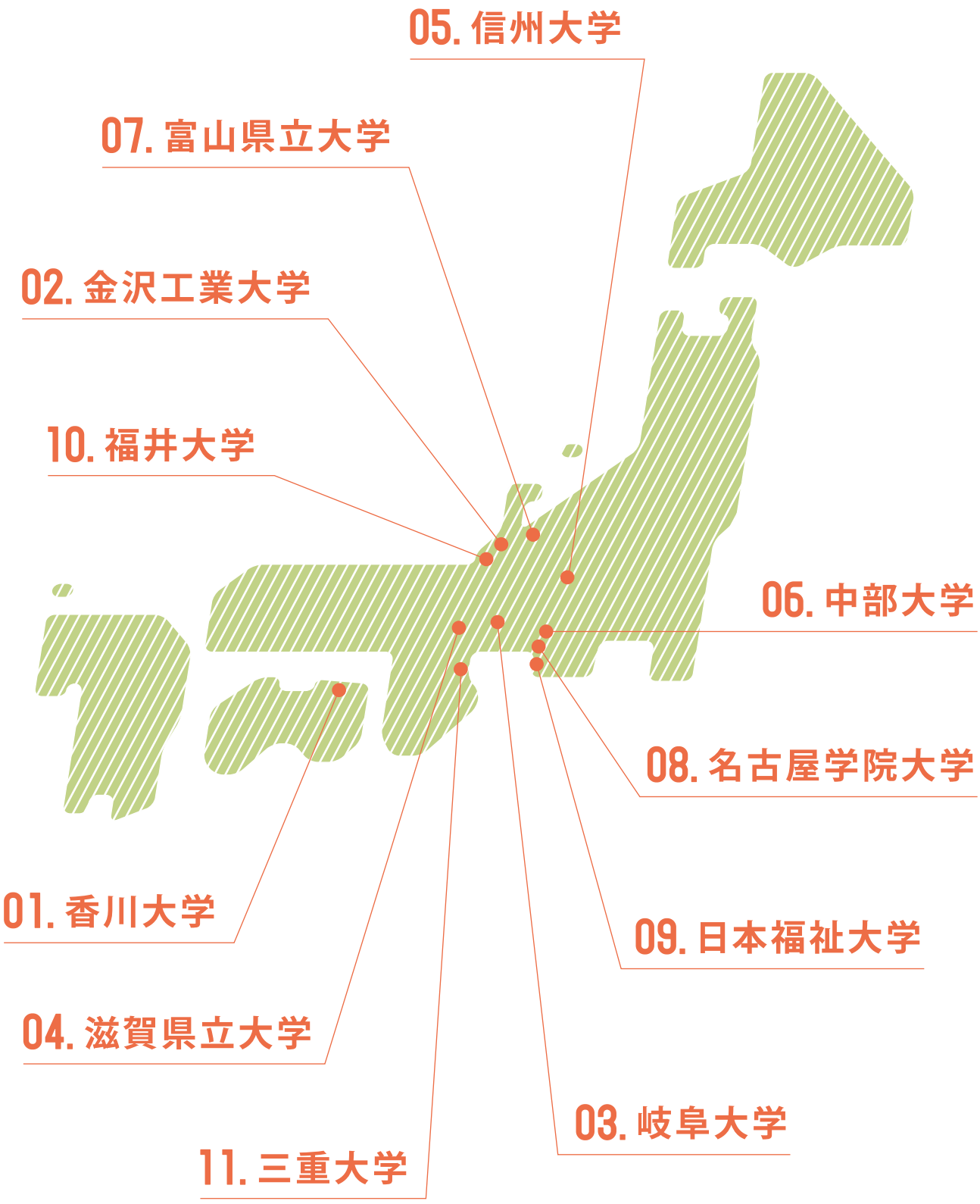
[図2　礫浦　早田地区訪問]

[図3　神木　神木フェスタ]

取り組みで得た学び

学生主体で地域に介入し、地域資源の発見・情報発信を行い、客観的な姿を共有し地域の課題を追求する。

参加大学所在地一覧


05. 信州大学
07. 富山県立大学
02. 金沢工業大学
10. 福井大学
06. 中部大学
08. 名古屋学院大学
01. 香川大学
09. 日本福祉大学
04. 滋賀県立大学
03. 岐阜大学
11. 三重大学

国立大学法人 岐阜大学

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）

中部地区COC事業採択校

学生交流会報告書

平成27（2015）年度

編集・発行　地域協学センター
〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL .058-293-3168
FAX.058-293-3167
http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp

発行　平成29年1月

装丁・印刷　canpai design

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community

国立大学法人
岐阜大学
GIFU UNIVERSITY

文部科学省
地(知)の拠点

国立大学法人 岐阜大学
〒501-1193 岐阜市柳戸1-1　TEL.058-230-1111(代表)

岐阜大学 サテライトキャンパス
〒500-8844 岐阜市吉野町6-31 岐阜スカイウイング37 東棟4F　TEL.058-212-0390(代表)

CCSC 地域協学センター
Center for Collaborative Study with Community

[E-Mail] ccsc@gifu-u.ac.jp　[URL] http:// www.ccsc.gifu-u.ac.jp
TEL.058-293-3168 FAX.058-293-3167

発行：平成29年1月